

平成二十八年度 学位請求論文(課程博士)

『逆修説法』の研究」 論文要旨

大正大学大学院仏教学研究科博士後期課程仏教学専攻三年

学籍番号 一一〇四〇〇一 安孫子 稔章

本論は『逆修説法』の研究」と題し、浄土宗祖法然上人(以下、諸師の敬称を省略)の遺文の一つとされる『逆修説法』に説かれる法然の思想を明らかにすることを目的とし、全四章にわたって考察を施す。

『逆修説法』は、外記禪門なる人物が催した死後の往生菩提のために生前あらかじめ善根功德を修しておく七日(四十九日間)の「逆修法会」に際し、七日毎に六度の導師を勤めた法然の説法の記録であるとされる。したがって内容も初七日から六七日までの六章段にわかれており、それぞれの七日で、阿弥陀仏身に関する讃嘆(「仏功德讃嘆」と『無量寿経』・『観無量寿経』(以下、『観経』・『阿弥陀経』の「浄土三部経」に関する讃嘆(「経功德讃嘆」)が中心的に説かれ、それに付随して教判論などのその他の説示も部分的にみられるという内容構成である。

ただし、『逆修説法』はその成立を示す確たる史料が現存せず、他の法然遺文に説かれな特徴的な説示も散見されるため、法然の思想変遷を辿るための副次的な資料として使用されることはあっても、法然教学研究の中心の対象となることは少なかった。そのような状況のなか積み重ねられてきた従来の研究では、『逆修説法』に説かれる思想について、(1)法然の思想であるか不明とみる、(2)法然浄土教思想の集大成である『選択集』に至る以前の思想段階とみるという二つの視座から研究されてきた。これに対し、本論では『逆修説法』の成立に関する一定の見解を示すことで(1)を否定して『逆修説法』に説かれる思想を法然のものと断定し、さらに、(3)説法という場面性を通してみるという新たな視座を導入する。つまり、(2)(3)という二つの視座から『逆修説法』の説示を検討することで、そこに説かれる思想を明らかにするものである。

また、研究の方法論としては、従来は(A)他の法然遺文にみられる説示との比較研究が中心であったが、本論では『逆修説法』の各七日の間で同じテーマに関する説示の相違がみられることに着目し、(B)『逆修説法』の各七日における説示の比較研究という新たな方法論を用いた。

これにより各章の考察において明らかになった点を整理したうえで、『逆修説法』に説かれる法然の思想について、『選択集』と比較する形で提示することで論文要旨としたい。

第一章は『逆修説法』の成立と伝承」と題し、『逆修説法』が法然の思想を伝える史料であり、その説示にもとづく研究が法然研究として確かな価値をもつものであると示すことと、『逆修説法』の内容検討に先だって諸本のなかから研究対象を定めるテキストクリティックを行うことの二つを目的とし、『逆修説法』の成立と伝承に関する問題を考察した。

まず、『逆修説法』が法然の言葉を収めたものだとしても、その法然の言葉自体が、「逆修法会」という場面性の影響により、法然の浄土教思想を正しく伝えるものでないとしたら、『逆修説法』の研究が法然の思想の研究とはならない。そこで、第一節では、「逆修法会」がどのような儀礼内容・状況のなかで開かれ、そこにおける法然の説法はどのような意義を持つものであったのか、史料に残る逆修例を参照して考察した。その結果、平安初

期は供仏や写経が逆修儀礼の中心となっていたが、法然の時代に近づくにつれてそれらに代わって儀礼のなかで説法が重視されるようになり、それまでは儀礼の一部として形式的な仏讃嘆と捉えられてきた説法の内容も比較的自由な講説となっていたことが知られた。

これより、『逆修法会』における法然の説法も決して形式的な仏讃嘆ではないと考えられ、『逆修説法』が法然の思想を示す史料として法然研究の対象となることを確認できた。

次に、『逆修説法』の原本には法然の言葉がそのまま残されていたとしても、現存する『逆修説法』諸本に正確に伝承されていないことは研究の価値は薄れてしまう。そこで、第二節では、現在伝わる諸本を対校し、伝承の過程について考察したうえで、本論のよるべきテキストを選定した。その結果、『古本漢語灯録』所収『逆修説法』は諸本のなかでも書写年代は遅い方であると考えられるものの、諸本中最も早い成立とみられる『西方指南抄』所収『法然聖人御説法事』よりも原本に近い形式を留めているとみられた。よって本論では『古本漢語灯録』所収『逆修説法』を基本テキストとして採用することを明示した。本章の考察を通じ、『逆修説法』は『選択集』成立の数年前に法然が「逆修法会」における説法を行った際の記録であるとみること、また『古本漢語灯録』所収『逆修説法』に説かれる思想を法然のものとしてみることは十分に妥当性を認められると考えられ、『逆修説法』の研究が法然遺文を通じた法然浄土教研究として捉えられることを確認できた。

以降の章では、『逆修説法』の内容について、(2)『選択集』に至る以前の思想段階とみる、(3)説法という場面性を通してみるという二方向の視座をもって内容検討を行った。

第二章は『逆修説法』における阿弥陀仏功德讃嘆」と題し、『逆修説法』に説かれる法然の阿弥陀仏に関する思想を明らかにすることを目的として、『逆修説法』のなかの仏功德讃嘆部分の説示について考察した。『逆修説法』と『選択集』を比較したとき、『逆修説法』の最大の特徴は阿弥陀仏に関する説示が非常に多いということである。『選択集』は念仏がいかにより優れているかを理論的に証明する書であるため阿弥陀仏に関する説示は少ないが、対して『逆修説法』は善根成就のための讃嘆として仏・経功德讃嘆がある。浄土宗所依の經典である『浄土三部経』については、『逆修説法』より以前の成立とみられる『三部経釈』ですでに自身の考えを一つの形にまとめている法然であったが、阿弥陀仏についての考えをまとめた説法という形にするのは、法然にとつても初めての経験だったと考えられる。その点、『逆修説法』は法然の阿弥陀仏観を知るためには第一史料とすべきものである。

第一節では内容理解の準備として、『逆修説法』において「功德」という語を法然が頻繁に用いた意図について考察した。その結果、『逆修説法』で用いられる「功德」の多くは通常の意と異なり、仏と衆生の関係性を表わす語であり、浄土の莊嚴が仏を主体として体现された衆生救済のための有相と示すものであると明らかにした。第二節では、初七日に説かれる阿弥陀仏真化二身論と四七日に説かれる法報応三身論という二つの仏身論について、なぜ同一書のなかで異なる二つの仏身論が提示されるのかを明らかにすることを目的とし、考察した。法然は道綽善導流の阿弥陀仏報身論を継承しながらも、『逆修説法』では当時の日本仏教界において阿弥陀仏報身論が浸透していなかった状況を鑑みて、それを説くことを慎重に考えたとみてとれる。そして、初七日では「逆修法会」における説法という状況において、阿弥陀仏の特徴である本願成就・光明撰取・来迎引接をわかりやすく説くために独自の仏身論である真化二身論を用いた。これに対し四七日では、諸仏に共通する内証の三身の提示と、惣徳としての当時の仏教界における一般的な三身論の説明を施した。三

身論の説示意图としては、法然浄土教完成以前の天台宗的な阿弥陀仏理解からの脱却を図る思想段階であったことと、場面性の要求によって阿弥陀仏の功德讃嘆の必要があったことという二点を指摘した。第三節では、三七日に説かれる阿弥陀仏の光明の功德について考察した。『逆修説法』における光明に関する特徴的な十二光仏と常光・神通光の説明においては、場面性の要求によって衆生の利益が強調されているという特徴を指摘した。加えて常光・神通光については、これを『観経』に説かれる撰益文に引き合わせて解釈すべきとする藤堂恭俊氏の著名な学説についての検討も施し、その妥当性を確認した。第四節では、六七日に説かれる名号論について考察した。法然は「阿弥陀仏」という名号のうち、「阿弥陀」の別号が無量寿・無量光の意味を示すもので、「仏」の通号に諸仏共通の功德が内包されるとみており、「阿弥陀」の別号に一切の功德が内包されると説く永観を否定して密教的名号観からの脱却を図っている。一方、名号を万徳所帰論という実践論として捉える『選択集』とは思想的隔たりがあり、『選択集』に至る前段階の思想として『逆修説法』の名号論を理解すべきであると明らかにした。第五節では、五七日に説かれる極楽浄土に関する説示について考察した。法然は道綽善導流の浄土観を継承しながらも、『三部経釈』と『逆修説法』の説示を比較すると説かれ方の相違があり、また『逆修説法』には浄土の依正二報の功德によつて念仏の心が喚起されるとする法然独自の解釈もみられたため、『選択集』に至る以前ではあるものの、『逆修説法』の段階で十分に成熟した法然の思想を確認できる一例であるとみてとれた。

第三章は『逆修説法』における経功德讃嘆と念仏論」と題し、『逆修説法』に説かれる「浄土三部経」解釈と念仏論を明らかにするために、経功德讃嘆部分において「浄土三部経」解釈について三重にわたって説かれる説示構造に着目し、各七日の経典解釈を比較検討して、その相違から法然の思想進展と場面性の影響について考察した。また、二七日末尾において念仏往生の勝義性を示す八文が説かれる部分を詳しく読み解くことで、『逆修説法』時点での法然の念仏論について、『選択集』の念仏論との比較を中心に考察した。

第一節・第二節・第三節では、各七日に説かれる同テーマについての説示の比較という(B)の方法論により、それぞれ『無量寿経』・『観経』・『阿弥陀経』の解釈について検討した。その結果、各七日の説示間に相違がみられる要因として、(1)法然の思想的展開・(2)法然の説示傾向・(3)内容の補足・(4)内容の省略という四つをみてとることができた。このうち(2)・(3)・(4)は、説法という場面性が与えた外的要因によって生じた相違であると考えられる。『逆修説法』において法然に与えられた説法の時間には限りがあると考えられ、そのなかでは経典解釈のすべてを説くことはできず、予定していた説法がすべて終えられるとも限らない。このような状況において、法然は異なる七日において同じ題材について説くとき、当然以前説いたことを省略したり、また説ききれなかったと思うことを補足したりしながら、説法を進めていったため、(3)と(4)の相違が生まれたと考えられる。また、説法における主要な目的は仏・経功德讃嘆であるが、経典解釈を通じて法然が外記禅門に最も伝えたかったことは、念仏の相続であったに違いない。よって、法然は意図的に説法の題材を次第に念仏一行へと収斂し、念仏を説くことに多くの時間を割けるように自身の説法を調整していたと考えられる。その痕跡が表れるのが(2)の相違である。これに対し、(1)は、『選択集』に至る以前の過渡期である法然の思想が、まさに『逆修説法』のなかで進展した痕跡であると捉えられる。法然は約一か月半に渉る

外記禪門に対する定期的な説法をこなしていくなかで、当然のことながら自身の教学を改めて整理し、引文を改めて読み返していくことで、少しずつ教学上の変化をきたしていったと考えられる。いまだ『選択集』の思想段階には到達していないとみられるにせよ、このような思想の展開を一書内に認めることができるのは『逆修説法』の大きな特徴である。

次に、『逆修説法』と『選択集』の思想の相違をより具体的に示すために、『逆修説法』に説かれる念仏論を端的に示す二七日末尾の八文について考察した結果、『選択集』では弥陀・釈迦・諸仏の三仏同心の選択という念仏論の構造であったが、『逆修説法』では選択として説かれるのは弥陀の本願のみであり、撰取・我名・付属・証誠・留教が本願によって選択された念仏を支えるものとして説かれ、さらに化讃・讃歎が念仏を装飾する讃嘆として説かれるという三重の構造の念仏論であるとみてとれた。

さらに、念仏論の構造のみならず、念仏論を示すための説示構成にも両者間で明らかな相違があった。『選択集』では全体の最終章である第十六章段に八種選択義が説かれるのに対し、『逆修説法』では二七日に念仏論がすでにまとめられ、これを指針として説法が進められるという形を取っていた。そして、各七日でそれぞれの經典と引文に対し解釈を施すのではなく、二七日までに念仏論の概要を提示し、四七日までに補足説明して、五・六七日でより実践的な視点から念仏を説くという三重の構造による説法の組み立てがなされている。

このような『逆修説法』と『選択集』の念仏論の構造の相違は思想段階の相違として捉えるべきであるが、念仏論を示すための説示構成は、思想段階の相違によるものではなく、説法という場面に理由を求めるべきである。後から自由に修正可能な書とは異なり、預期せぬ事態も孕みながら臨場感を持って進行していく説法という状況に対し、法然が取った方法論が『逆修説法』の念仏に関する説示構成に表れていると考えられる。

第四章は『逆修説法』に説かれるその他の問題」と題し、『逆修説法』の法然の思想を読み解く際の重要な論点でありながら、仏・經功德讃嘆に含まれずここまで考察できなかったその他の問題として、浄土宗論・阿弥陀仏入涅槃説・例証としての伝記類・思想への源信の影響について考察してきた。

まず(3)の説法という場面性を通してみる視座から本章の考察を振り返る。第一節では浄土宗論について考察した。浄土宗の土台となる教判論である聖浄二門判が、はじめからその概念があったとみてとれるにもかかわらず、初七日の浄土宗論には説かれず最終六七日ではじめて説かれるのは、説法の相手である外記禪門の器量を法然が見定め、浄土門念仏一行への帰入を前提として、これから多くの者に浄土門を広めていく解説師となるためには、諸宗・諸行について学ぶことも必要であろうという認識のもとそれらについて詳しく説き、最終的には実践論のなかでそれらを聖道門として切り捨てるといふ構成を施しているためと考えられる。また、第二節で考察した阿弥陀仏入涅槃説は、三七日で説かれる阿弥陀仏の寿命無量功德とは矛盾しているようにも受け取れるが、阿弥陀仏の入涅槃の悲しみをありありと説くことができる説法においては、それでも念仏往生の者だけは入涅槃の後も阿弥陀仏をみることができるとする念仏の勝義性を示すのに大きな効果を期待できる説示であることから、法然はあえてここに組み込んでいると考えられる。そして、第三節で扱った『逆修説法』に多くみられる例証としての伝記類は、仏功德讃嘆や諸善について説かれる際に用いられ、經典解釈だけでは単調になりやすい説法に彩りを加え、より

印象的に伝える役割を担っている。第四節では、『逆修説法』における源信の影響について考察した結果、場面性による要求が法然自身の教学とは異なるものであっても、権威ある源信の思想を引用することで、それにこたえようとする法然の姿勢を明らかにした。

しかしこれらに対して、法然浄土教思想からみた場合異質と認めざるを得ない教説の数々は、すべて場面性に理由を求められるものではない。次に、『逆修説法』が『選択集』以前の思想段階であるとみる視座から本章の考察を再び振り返る。

『選択集』の思想段階においては、たとえ能化の学習のためだとしても諸行往生と念仏往生を傍正的に説くはずがなく、浄土宗の先哲たちに倣って我々も聖道門を切り捨てて念仏一門に入るべきだとする廃立的な説示となる。また、八種選択義に基づく選択本願念仏思想が確立されているため、念仏往生が諸行往生に勝る証拠としての終益は必要としない。よって阿弥陀仏入涅槃説については一応の提示はするものの、詳細には説かれない。伝記類に関しては、諸行往生の実例となり現世利益を積極的に説くものであるから、当然排除する。そして、自身の浄土教的世界観が構築されているため、源信に依拠することなく、必要に応じて引用するに留めている。

このように、念仏論に留まらず、本章にみた諸行論や浄土宗論においても、『逆修説法』と『選択集』の間には法然浄土教学上の思想段階の相違が確実に存在している。

以上の各章における考察により、まず『逆修説法』はたしかに法然遺文の一つとして認められる史料であり、そのなかに説かれる思想を法然のものとしてみることに問題はないと考えられる。『逆修説法』はその内容をみる限り、『選択集』成立の数年前の法然が、自身の教学にもとづいて阿弥陀仏や「浄土三部経」について説いた説法録であるとみられる。

そして、『選択集』以後の時代に生きる我々が『逆修説法』に説かれる法然の思想について読み解く際には、『逆修説法』時点では『選択集』に説かれる選択本願念仏義に代表される法然浄土教思想が確立されていない段階であったという内的要因に注意を払う必要がある。それが顕著に表れる例として、阿弥陀仏身に関わる説示と諸行の捉え方があげられる。『逆修説法』では、白毫・光明の解釈や名号論など阿弥陀仏身に関わる多くの説示において、源信の浄土教的世界観による解釈がみられる。また、三福の諸行について詳しい説明が施されるうえに、諸行往生を実践上可能として示す伝記類がいくつも引用されている。これらの説示は『選択集』には存在せず、『逆修説法』が前時代的な思想段階であったからこそ、特徴的な説示がみられると理解できる。

ただし以上のような内的要因に加えて、『逆修説法』が「逆修法会」という儀礼の場でなされた説法録であるという場面性による外的要因も考慮に入れなければならない。それが顕著に表れる例として、真化二身論の提示と各七日における念仏論の説かれ方があげられる。真化二身論は道綽善導流の阿弥陀仏報身論をよく咀嚼した法然が、来迎引接の像を前にその功德を説くという場面において、本願成就・光明摂取・来迎引接という弥陀の個別的な救済作用を最も上手く伝えるために用いられた仏身論である。また、念仏論の構造が二七日末でまとめられるのは、先の見通しが立ちづらい説法という状況を考慮し、あらかじめ概要だけを説法の序盤に示しておこうとする法然の狙いにもとづくものであると理解できる。

すなわち、『逆修説法』に説かれる法然の思想の正しい理解のためには、浄土教思想の未確立という内的要因と、「逆修法会」における説法という外的要因の双方を考慮に入れ、そ

のバランスを見極めながら慎重にみていくことが肝要であると結論できる。さらに、『逆修説法』は一書のなかで思想展開がみられる特殊な書であるという点にも配慮すべきである。そのようなプロセスを経たうえで『逆修説法』の説示を考察した結果として、本論にて明らかにした『逆修説法』に説かれる法然の思想を『選択集』との比較という視点から、以下のように提示できる。

- (1) 阿弥陀仏論は『選択集』に記述がないため比較はできない。『逆修説法』に説かれる真化二身論・光明（常光・神通光）・寿命・名号・浄土に関する思想は法然独自のものとみてとれるが、天台宗的な阿弥陀仏理解を脱却しきれていない。
- (2) 念仏論は、『逆修説法』内の思想展開によって、念仏諸行相對三義へつながる重要概念が生まれている。『選択集』にてあげられる引用文はすでに『逆修説法』にて認められるが、選択概念で捉えることはできず、構造も異なっている。
- (3) 『逆修説法』では諸行往生と念仏往生を傍正の関係で捉えており、廃立の関係を第一義とする『選択集』の思想と異なる。